158
1288
150

改正新刻

玉華正道集

382

立華正道集序

智者ハ水ヲ仁ニ喜ヒ山ヲ壽ニ樂ム。蓋シ其ノ
性ノ自然ニ然ラシムル所ナリ。陶淵明ハ秋ノ菊ヲ愛シ。周茂叔ハ
蓮ヲ愛スルガ如キ。實ニ其ノ性ニ適スルヲ以テナリ。誠ニ水ハ
尺一樹ヲ植テ江山千里ノ風景ヲ一ツ心
時ノ變化ヲ生ズ都テ宇宙間ノ
萬ツハ此ノ二ニ。奥
故實ノ格式ヲ具ヘ

真草行の三体よ
り通して一巻の立華正道より一集とな
作る事一然る所
天和第四癸子節　尋舊多

立華正道集目録

イ總論之事
ロ專可嫌事　十三ケ條
ハ真之草事
ニ松竹梅事
ホ合心之事
ヘ二心之事
ト竹之心事
チ音之心事　附聚心
リ藤之心事
ヌ對之草事
ル筒束花事
ヲ神前華事　附佛前
ワ四方面花事
カ水仙一色事　従是七一色

ヨ 菊一色之事
レ 蓮一色之事
ツ 櫻一色之事
ナ 一草之事
ム 相生心之事
ウ 四季心得事
ノ 四季水除之事
オ 三ケ前置事
ヤ 胴作有物事
タ 松一色之事
ソ 杜若一色事
コ 紅葩一色事
エ 壇蹤躅之事
ア 五節供之花事
キ 六葩遣之事
ユ 祝言花之事

ケ 移徙花之事
コ 追善花之事
テ 受流之事
サ 内副之事
ユ 水除物之事
ミ 通用物之事
ヱ 自前兩遣物事
モ 若之體之事

フ 出陣花之事 附箆城
エ 受學之事
ア 左流之事
キ 中ス上之事
メ 祝義雜物事
レ 自後兩遣物事
ヒ 暮之體之事
セ 差合雜物事

又 砂物之事　以上四十八ヶ條

附

一 花瓶之込挿様之事

一 砂物挿様之事

一 不卅挿様之事

一 立華可指意得之事

以上四ヶ條

目録終

セッ道具出生之圖

右之道具而立之

壽

❶ 總論

立華(りっか)は表現(ひょうげん)より外(ほか)なるものをあらわすに千草(せんそう)万花(ばんか)これを生(せい)
かすところのあれをとて其物(そのもの)或(あるい)は相意(そうい)をさす大(おお)かた心(こころ)或
は苔(こけ)やまこをはじめ雑木雑草(ざっぽくざっそう)のごとく
を用(もち)いべうび先(まず)それおそんとおりくび林
より勢(いきおい)勢(いきおい)の枝(えだ)ぶりをそこら通(とお)れこうら色
んなあるべし其(その)摩(さ)ふうぞえおくたる
をかちとそんぐうまし心(こころ)をうまし

心副受流見越前
く次第かきつぐ
く重かさたかろく
そう大小をさし
ぎ草もろ除
ク昇くたふべき
木をよろこばれくう
守用木枝葉一つ
花も也松四季折
ここれまるかしよう
専廻べき事也

葉あわ花もろうた
花と葉こそひろ向
おれをはなく
草して木枝包木にて
長くろべのう
枝葉水かつく事
十文字かこと枝
切枝とてろ際

但一方
いろを

二而かた事

色事

一渡より前へまもる枝のこと

一花瓶のひらくさぐるをよき事

凡そ枝を曲るよさそうなる事

八 裏之葉もの 三重ね松 黒義 なし

一心を三重のそう松より。二重ね松 酢醤 蓮根 などのたぐ

副は竹又は柳そう松梨ひば

ひくくまがいようにー。心こくしい枝もち

すぐそうでよさそうなー。志松なども細か

ぐれをとべそう直心もつりて花のあるのとれよ

れ眞ん花なりぬとそれ心を心かくしというう

二 松竹梅之花の事

一三種剋の花ぬき松。たて松を梅竹ま

いくりそこ一種の中ちんを松副を竹受を梅

もそなをいてう

木 合心之事

一三重の若松を二本おもてを松

もと一中下三本のうちを小松副をうしべし梅枝

ぬれなえれ黄北表のもの

へ 二心の事

一心を松と竹とよう草などをもつてあれ

ともくりそこ二本松ともるさなり松花

此方の手竹は左右の手副は竹の方より
さしべし一寸位間より下をよりかゞむ心
源前垂直面方高ひきをゆるしたなしおと用也
為うべば前垂松乃すそを陽ともに外うくべきを
べし竹のうきをも陰ともに前へうくべうず外家
のうきをもよりは口伝ある事なり草木大象面
方へうしまをしてくるしむ猶うきれうん外
うで

十 竹之心の事

一先枝とまりなるむ枝とは寸位とい
くらかうでり枝とまりうる時は二寸位とも
ゆく直ますべし枝を一切ともに二つ切ても
をかうちぐび枝の繁乃家乃角へもむ枝を
副をそうされなびさの方よさべし外の体前そもわ
まうをせどしてもくからん落枝ごとく
もうれうる処を畑で枝に伝あり

十 苔之心の事 附曝心

一正心或は副更ふうれ神ますべきの枝
はうふ意一胴苔こをかすあうらひかそれこ
枝に伝あわうれ心をもう同

⑪ 藤之心此事

一松此事をおぶり右のごとくなり松ひけさせるなどのごとく又は副受るもの竹ふたまつの松ともにふるものとす

又 對之花此事

一直心まつ除心ともに心正心。副受流ものとす

もとなるふりなり同一道具にて用べきものかくのごとく流。副受ともは用へきものとす

松と竹と梅なとそれ〴〵の色をとるもの

には俗あり三幅對の真小花と称する時

ゝ方對のごとく此ときは中小真此花をうけ

うり或ハ木ともは中真此屬花ざうりともはよ

⑫ ごうけ此花之

一盛籠底の下小砂のうへにこうづ此花台

をうる事なり心を除心

うべし砂此花もうけられも底のあるひこと

不可ばあり

⑬ 神前佛一前此花の事

一佛前三具八足此花を用心此長花瓶乃ごとき二本ごとく三長

かごとくべくごとく三本此花台ごうひこれ不

松より右長花瓶とて

外北方ハなる紀枝を供へ四方ハなる紀枝を定規に切り枝となして
やうふさたべ一瓶の中ニ入れ一心の枝仏ニ向へなるやうに
切まゐあり此時さし枝に佐あり流を揃へ一
枝ニ一心の枝仏ニ向へなるやうにかまふとさハ一のこゝろを
といてう香炮此中ニまして流のう紀をおいて
許前ニ花を供へ仏ニ向へなるやうに許前ニそへ又
雑華ニさしべくこゝろをといてう許前佛前ニ雑木

㊐ 四方面之華供事

心副受流枝なるべし面ニ花ニ向へなるやうに
そもえべくこゝろをといてう許前佛前ニ雑木
あるへきうべくこゝろをといてう許前ニ雑木
ニ向へなるやうにこゝろをといてう許前ニ雑木

㊑ 水仙之一色華供事

一心を第一とし花をもつて胴修前ニ
ふるまひをあらわし副受流枝ニ花ニ
花をもつて副受流枝ニ花ニ
ふうのべくむをもつて胴ニ枝ニ
花へなるやうにこゝろをといてう許前ニ
花をもつて胴ニ枝ニ
ゆ法花なるやうにこゝろをといてう許前ニ
わまゐ枝ニふうふ事なくこゝろをといてう許前ニ
枝をあるやうにこゝろをといてう許前ニ

又六枚もつゝみべし あるひは
ばかんこゝろをもて 一面
のつゝみありてもよし
なるべきなり
金銭花勅
墓 こゝろの中なり
しかもまふ事なり

三 菊花一名を
一細き竹 あるひは木にそもまん中よさし表剛
文流なるやうにケ様よなさゝ記はよ
やうにしつらふ心ハたゞんもなし
うらかうらそれをの也
胴 菊をもげく

前垂小菊よりいろ〳〵これ裏菊にまぜ
きくといふをきるの花まぜるもの也此一名ハ角
余よりてかれをよびへさうに習ふこと

四 松之一名
一心 更用 一本とえ松若枝
さんべし松若枝枝、松そ
ゆるやうにしてよりをかけ
と更えくそをかけ
ゆる枝よんのべし枝
習ありて松をきさ盤

素靱をも或人松ノ一ト
そそいでも事半ともゆへなるべし

(七)

菫ノ一名ヲ
一心ともいふ花ともに紫ともに又紫ノ
外ニ白色ノ事ありこれ河菜ノ
白菜ニも花ハ似たり葉ハ
菫ニ似てそれよりハ小ク
細ク毛ありて
ありこれ
ありこれ

(八)

杜若之一名ヲ
一あやめともいふ花葛藤さしてまねくに
かさつくこれ花ハ用ゐ処尝て
をらざれども
なるべし
なともいふ
用ゐる事あり花ハつゆ
ゆるゝといさゝかの
習あり

の　梅むめ之一ゑだ事

一心副受よすれも先まず梅の一ゑだといふ多
く用る程ほうのものうら花さくまでも梅そもすると
のかうら花さくまでも梅そもすると
多きそうら花さくまでも胴苔そうれありよ苔花ふ
さうれ苔とうるべしちや花を用ひて一ゑだよつ
ふのか小ゑだを小つくりふ梅の一ゑだ
しおりのおこ亜をうるまうに侍あうさう

子　心副受はつゑだといふ之まう

紀氣ふ一ゑだ

心副受はつゑだといふ梅ふ一ゑだ之ごとく
右三ゑだハ紀氣ふ梅ふ一ゑだ之ごとく
合せうの一ゑだとふ分なうの
おくよそうる程ほ侍あうさう合の相

十　一草のすい

真ハ時節れるも苔いろくうありあしめ本
をうづへうさゑ本也苔ふ緩くうつけあうひ

両方へさし分くるもかくのごとくなれども
乃ち松なれば
㋐ ぞうのごとし
或は副受よつひそ
乃かくうくれをまつへしこれつくじ
をつふかなくひあくしてくる
㋑ 相生之心之事
一松乃をそ一ぬきそて胴くう両方へやれくる
心なり副受正心等三ツ作くおりをふく
のさたさそ松をふといつる君をこをかく一
習あくまも松秘乃花をれいあざくもく

㋒ 又曰供ノ可用之事

元三 梅花 水仙
上巳 桃花 柳
端午 竹 菖蒲
七夕 梧桐 仙翁花
年頭 菊 萩

㋓ 曰季共心得之事

一春を初くあくふこそやくさくあくも
一松葉を用ひ一瓶共時ニ
ひのがくる枝あくてくるこさをべし

一夏ハ多花ちよまを染もげこのて、をあう
一くたく紙たゝへなど御ん陰をくり
一ろげ海ゝを指へしく
一ほまくを下まくけく
一燈をゝ一瓶もそひくく若やまき紙あり
一ひてう染を用ひて草もげくさんで
一冬を一瓶をれそてをいそをかろくたた
一て下ものぐく松ぶさなくそひ氣
一跡れんあうへさなあり

(八)　四季を水除のき事

一春冬ハ多添ひこく指へくく夏秋ハ多陰

第七水瓶をゝてんゆへなり

(九)　三十九前ゝをく事

一松小もぐ松ゝこ久也松小もぐ染ひを色
一うふ習ある松ゝと別して碧松
一枝松乃ものしまむさまを立れま
一実をへされなちちあひふを
一もゝもひあひふをつひふを
一ひおり名人ゝ松ゝを河し一瓶の松
一前ゝ瓶あけくゝ花堂ゝをく幸し松りくく
一入とゝまハ松九物ゝ賓二ゝと

よき教をまもりつゝひたすらに入梁となるをすゝめ
くを入梁なくてをうるは僞おわることひとつの
おろかみそうり

㋑ 大梁はひやうめ

一枝葉 枇杷 芸薹等ハ西梁の裏ハ張
表を陽勾踐まで也 一ハ花六梁也 花ハ
そうをも畑まし二枚大ふるをおしらひり
なうひろき家乃代おまくうえ大梁つひやう
ふねおろべし

㋒ 胴紐小智をまもる事

一枝葉 笹枝葉まもる西をやけばこれ
の教さとりおろまじ 一ハ花ハ
胴をうかまふるなり 一ハ苟葉也葉をうり
ぶまもりおり

㋓ 祝言之花をまもる事

一根生 心。合心。松竹梅。二心。これをえべ
しいづれも真の花也 退心ハさうふるなり
なうかれうる枝葉並よ行をかれと雨うお事
史へうまで時代ハこうんをくのもの

㋔ 移徒の花をまもる事

一赤きある草木残暑一ト入秋ならでさく事
一秋ちかうなりさく色一
(フ) 出陣并ニ籠城之花之事
一草木とも赤紙黄紙白紙之花を指
色一ト入れてそめよりのごとくなるを桂
のごとくなるを残暑まで咲ゆるをえべ
(ニ) 退去之花の事
一三十五日ゟ内四五日を赤きさく花を
見べし一昔之やまとなでしこを指ざるもの
いねは昔之ながれの美を見べし一名花残菊

(エ) 水際退の心文を胴ゟ退ル心などえべ
一竹柳のごとくなる事
(テ) 受なげ一の事
一心よをそりおのくのきる時之文と流のごとく
心ふかくおふかをを文と流よかよ見てさん
る迄されども其のなげ一のごとくなるものをあ
ひらふて七川先をそ中流ゟ八つ方ゟ女ゟ
(ア) 左流之事

一心の一枝なるを何もらひたく文あつらへたく一枝をたのみあるを見をたのみ

十 問副(そへ)ものとよき

一心乃一枝さうの副(そへ)ものとよき心より副(そへ)て出(いだ)されば問副(そへ)ものとよきなり

十一 中(なか)のとよき

水仙　仙翁花
芒種花　苟菜
ちゝろ　いちろ
楾梭　杜蘅(かきつばた)

すゞけ　まんぎやう
こあふひ　けし
雞冠花　おほゆり
ゆふ顧(かほ)　ゆふ顧(かほ)
ゆふ顧(かほ)　ゆふ顧(かほ)
ゆり　ゆり
箏(ものゝ)　箏(ものゝ)

こしきぶ　あふひ
かるかや　かるかや
ひめはぎ　ひめはぎ
くれこゆ　ゆふ顧(かほ)
ゆふ顧(かほ)　ゆふ顧(かほ)
ゆり　ゆり
箏(ものゝ)　箏(ものゝ)

十二

きんせんか　寒菊

おもふ人の名を紙数(かずへ)をつゝみ
心ざしの流のごとくにして
好(よき)事(こと)ある草木をしるす

ぜんまい　ぜんまい

あくさ
かやつりぐさ
くさまおがくさ
そうかはもあり

秋俳句

季作
いそもの花
（ききょう）
萩
女郎花
男郎花
おみなえし
をみなえし
をとこえし
をとこへし
藤袴
ふぢばかま
ふぢはかま
河骨
こうほね
みそはぎ
そばの花
かぜの花
まんじゅしゃげ
ぢんじゃうげ

花そうもう
ぶんまわし
ざぼうし
とくさ
桐くさ
着ぞこ
石竹
ひとつ葉
白丁花
こぶしの花
茶の花
山いもの
ばけ

小ぎく
くさぎく
沢らん
なでしこ
ひとつ葉
石竹
雪の下
ぢんじゃうげ
はぜの
あせか
ちやの花

小ぎく
おりく
くさぎく
沢らん
なでしこ
ひとつ葉
石竹
雪の下
白丁花
こぶしの花
茶の花
山いもの
ばけ

ひぞん橘　　まき
あさごおもり　　ためりてゆり
殘花　　雜木

そうのまいを見へうらべそうかれ
そうのまいをみれとまりてうら通へーんねず
一なり

（三）

竹　　遍周抱き事

ふぢ　　山ぶき
ひろや　　小ちぐ
ほんだう　　ぐんそく
おもと　　せんてんそう
　　一川だ

（七）

重天　　ちやうちやん　　あじさい
てまり　　ぐんばい

多くは梅桜杏桃李等の類の事
らくまをまたに通りてゐるもの也　　石南花

梅
松　　桃　　梅　　椿
枇杷　　ぶつそう
ミかん木　　南天　　柳
ふぢ　　庭柳　　いのこ柳
海栄

加様之類をうら緑にてくる也

芦
細葉花
杜若
あふひ
ちとろ
てまり

菊
芙蓉花
こしき
檜葉
ちやう
あらゝぎ

かやつり草
女郎花
なでしこ

松
柳
もみぢ

檜
紀梁
ひが

あし
若よ
つゝじ

梅
桜
松

ひのき
かしき
さゝ

まつ
ちとせ
あふひ
ちやまて

細若ハ　　さげ

右ものいなり

廿　草木美合抱丸事

一竹よ　柳　落　南天　直苔　苔

一苔よ　竹　竹　梅花　水苔

一柳よ　南天　落　柳　苔

一南天　落　柳　苔

一落よ　直竹　竹

一梅もとよ　苔　水苔

一白梅よ　いのこ柳

一牡丹よ　苔菜

二抱のもよ　美あり丸實丸まる

右丸外柱をべつ他をもて支ふれ

抱あり丸實丸ふ一抱丸もの

砂之抱丸もの

砂の抱を立花丸器儀なるものこのゆへ

七つ丸ものを笑ひ丸ものなり

七ツ作法を立花丸法

ゆへ丸事抱一攫砂二攫砂の地そり太丸

宝ものいつもゑくぼふ男ふ

抱を四ツ一二ふ砂を立義二ツ丸のみなり

立花のん抱丸もの　あらず

板よこ〻をもちてさゞれ
右記上四十八ケ條考ふべし

花瓶乃口指指之事

一藁のくゝり目をとりそへて一指指より中一寸許
をそろく小口だゆひもて瓶のふとさ程につめ
さて瓶つめ右兒指をそなる程ゆるくかく
指つめをそろへ瓶よ入よハ瓶の
にくわこぶとりさげ
もこゝゆるにゆふべし
おゐ〻わけくゆへし秋冬を一ゝどもも
とたり

砂之指指之事

砂の庭よりげを指指より
此ハ立姜
此ことくこゝろへなどさ
てさわ別くおゐて
ふるとゞい設を新そ
そ設新より新へ入こ設なるへ
小石をそろへさそ
方よりあひろさ方
きに切揃をおくもこれをふとをいう

草木指指之事

一をゞくれ木指より

そのまゝなを燒（やき）てみるもよしこゝろ
ゆくまゝ書そこなふもの久
夏の中植（うえ）ものゝ
そやうにそんずる和らぎ
水仙 早梅 梅（うめ）擬（もどき）
くおりく 楠（あけ）よ
をゆれじてやくひろ
一 葵 ゆうる 松をつけ
やさくそれよ
くつけく
ものをうつ
一 ゆ 作 ぬ

をひな葉一さんなり花
屋一一金銭をもあ
架をそうまあり

一荷葉花もふもうみもとをみとをを
屋一一巴形ふやうにもあるふ

一声 荷葉 同 計
一竹 花瓶 そんと思ふ前
女もるおれを葉もの
みすよまそみてをぬ
ここ入れをそ中へ
こんそうの屋ふすぐ
一立ちまひく

まぜこねてよくねりをうみべし一染れてもあせもしまりなきもの

一落されをもちひるに垣みを打廻りしてあの板ありつゝ湯ふけみよひて何ごと一紙さゝ色をおりもの

一同葉河骨沢桔梗なとのみ黄土紙こまぜまぜ糸にて板をくゝりをれ下を切廻みをとゝこてよくこゝろみるものなり

一桔梗はあや免んなとも志かこゝろは花ともいはぬうとゝもよう付もちひくれなゐ

一杜冊苅茅米嚢花なとを切よを竹つゝ或もを折てより一紙外鉢をいひれてたゝらし煮もよふふとをもちひ銅刀を用一一杜冊苅茅をとぢくりかくこゝろみべし一杜冊のことくにしたるもの也茅花をあくるもの用べし一他花花んひみやきなとも皆うみの方

一若又ハ胴よ作ふをとこゝろやきなとも皆うみの方

なりなどの込入ものつくり自由よ
一萬百合杜若桔梗其外何にてもよろ
しきとおりひたひらきたるを糸しく
まぜたひらきたるを糸ばかりを糸しく
一とびくまをそまよハ燈火みたハ庚申
絵そべし
一心太のけしきとなるとき張(はり)紙入くびら
ばうなるまをたゆやうにてもなるもの也
一副受流等ハ相そへ引をわかれしよりハ
ちがひよりハ引ずてうらへやうにさつくのこと

うしんハなものつくり自由よ
一花客施もよ花瓶当(あて)しよりハ花瓶よ
もや咲ものを客ハ指べし義ハ右を陰
ようともいふ也ハ産の方へ向(むく)たを陽
きおりまる客よ真(まこと)ハ産のつきへ
一花もよ二色つるハ産とのこへ
一花もよ正面のうしろ向(むく)ハ主(ぬし)
うし前(まえ)ハ無拍(はく)絵(え)そへ墨蹟(ぼくせき)そへ
きうし前よ名所(めいしょ)の

無相乎於竹或い梅等ゟ
いたす事一ト通りにてハ
意変りまさなれども
よろしく御得そこの処を利

石田ケ隙

立華正道集跋

書坊

立華正道集跋

本邦立華之圖書振古行于世者頗
多蓋シ昇平之賜而上自宋門碧殿
下至栄扉茅屋人人為清遊之翫や
或近聞洛下此道達人所立之華正
形所演之故實圖之解之名立華正
道集私藏諸巾笥為嵓玉剞金之思
尤可謂全書者也因此再三請而不

正終鋟千梓而流萬方也嗟志千華
道之人取法於此以得正道之傳則
豈不至寶哉正圀明解誠立華之龜
鑑也

天和四甲子歲三陽日

皇都　書林　玉池齋
勉止齋　連刻